

住宅計画の地域的性格に関する研究

石原 清行

—都道府県住宅供給の戸建分譲住宅計画の分析—

目次

はじめに

1. 研究の背景と目的
2. 研究の対象・方法
3. 公社分譲住宅の特徴と地域でのシェア
4. 住宅計画の分析指標
5. 住宅計画の地域（公社）別分析
6. 住宅計画のバリエーションと地域性
7. まとめと今後の課題

はじめに

この報告は2カ年にわたる研究の初年度に相当する部分をまとめたものである。

住宅の「質」は計量可能な「規模」のみで把握されるものではなく、住空間の構成や物的計画あるいは住み方との関係といった定性的な解析が併行されるべきであろう。さらに、それらが地域・地方によって異なるとすれば、尊重されるべき点は何か。既往の住宅計画を新たな視点で見直す必要が生じており、初年度はその為の準備的研究として位置づけている。

ここでは1つの試みとして、全国都道府県住宅供給公社の住宅計画を研究対象としてとり挙げた。まず、それらの実態分析の結果を示し、次年度へのステップとしたい。

1. 研究の背景と目的

最近の住宅は全国的に、ほとんど変わりのないものになってきたといわれる。

もともと住宅は地域によって異なる自然的環境から人間の生活を守り、地域の「歴史・文化の蓄積の上に成立する地場的産物であって、地域的な特徴や工夫が随所にみられた。現存する「民家」や、戦前に建築された町家、あるいは農家には、それらが残在し継続させているものが少なくはない。

しかし、都市生活者が増加し、生活行動や住様式が均質化してくると、彼らの住宅は都市的住宅として一定のスタイルをもつに至る。住宅の画一化は、これらが次第に地方へ波及する過程といえるであろう。

とくに戦後の動きは急であり、その促進要因としては次のような点を指摘することができる。

- A. 生産・供給側の技術開発と経済効率至上主義
 - ① 新建材・新設備の開発と量産化
 - ② 資材流通の全国市場化
 - ③ 外材依存への傾斜
 - ④ 大手住宅企業の地方進出
 - ⑤ 構法・工法の合理化・簡素化（真壁造から大壁造へ等）
 - ⑥ 冷暖房機器の普及
- B. 同質的需要の激増と供給主導型の住宅市場
 - ① 都市生活者、核家族の同質的需要の激増
 - ② 膨大な住宅難・住宅困窮世帯の存在
 - ③ 住生活の近代化・合理化志向
 - ④ 都市化に伴う敷地の狭小化
- C. マス・メディアによる情報の同時的、全国的伝達
- D. 建築基準法、住宅金融公庫の融資条件等の画一的適用及び公的機関による均質な住宅供給
- E. 集合住宅の「型」計画—DK型、LDK型住宅の普及

即ち、相対的に低所得である膨大な住宅需要に対し、公的機関の平等主義と生産・供給企業の営利主義が重なる近代化、合理化路線の中で、地域的、伝統的な特徴は、総体として、加速度にふっしょくされてきたのである。

現在、住宅を計画する上で、地域的な配慮を残しているのは、気候・風土的条件によって規定される部分にすぎないのかも知れぬ。（むろん、住宅設備の完備によって必要でなくなる可能性はある。）

しかし、この数年来、住宅と住宅計画をとりまく環境は次に記述するように大きく変わってきた。

- (1) 低下を続けていた新築住宅（フロー）の持家比率はオイルショックを境いに上昇に転じ、再び持家が住宅建設の主流を占めるようになった。
- (2) 住宅規模（フロー平均）は、各地域とも依然として増加傾向にあり、永年の懸案であった絶対的な規模不足がかなり改善されてきた。
- (3) 昭和53年の住宅統計調査の結果が示すとおり、空家率は著しく高まり、“住宅余剰時代”に入った。
- (4) 以上の持家を中心とする住宅水準の向上を背景に住

宅企業側から「地域性が配慮」されることが多くなった。地方の建売住宅業はむしろ合理的生産を前面にすえていたプレハブ企業あるいは全国マーケットをもつ有力住宅企業ですら、住宅の地域特性を先取りし、経営戦略として、これを創出する徴候が地方ではとくに顕著である。

(5) エネルギー危機を契機とする省エネルギー、省資源対策の立場から、新しい住宅開発が要請されている。

(6) 未だに、極めてムード的な段階にとどまっているが、「地方の時代」に象徴されるように、地方見直しの時代的背景がある。それが戦後の近代化・合理化の中で喪失していった地方個有の文化・伝統を再評価し、守り育てていくことであるとすれば、住宅計画も又、その影響を受けないわけにはいかないだろう。

つまり、住宅の質が本格的課題として登場してきたこと及び従来の供給主導から需要主導へと住宅市場が転換しつつあることを物語るのであるが、問題はそれらがそれぞれの地域にフィットした、より豊かな住宅計画につながるものであるかどうかである。

住宅の規模が増加するほどに、従来のコンパクトな住宅計画の基本であった機能性・合理性の追求が陰をひそめ、伝統的な接客中心の「みせびらかし」住宅が、地方では目立っている。

とくに住宅計画のサイドでいえば、地方で最も一般的な100～130㎡の住宅計画は、いわば「型」計画を中心とする一般解と建築家が関与する特殊解の間隙にあって、理論的展開が遅れている領域でもある。復古調を引き出さざるをえない遠因でもあろう。

この研究では、以上の点についての明確な指針をみい出すには力量が不足しているが、少なくとも研究全体としては次のような事項に焦点をあて、これらを明らかにしたい。

1つは、近年、建設される住宅（とくに持家）に地方性とか地域性といった住宅計画上の特徴が認められるかどうかである。認められるとすれば、それはいかなる部分であり、それらを規定している地域的条件は何か、可能な方法によって実証的に考察する。

もう1つは、住宅の規模増加に代置される住宅の「質向上」の意味する内容を住宅平面と住み方の採取によって、空間計画として評価し、住宅計画の今日的状況を把握することである。

なお、「住宅計画」の概念は、住宅づくりを目的とする一連の計画的行為を指すものと考えられる他、公共の手によって「計画的に」供給されるべきであるといった社会的な意味あいを含む場合、あるいは、対象とする住宅のタイプ（1戸建・共同建、借家・持家、民間・公共）によって、多様に解釈されるが、当研究では、1戸建持家住宅の間どり、外観デザイン、材料等の空間的、物理的な計画技術であると狭義に理解しておく。

2. 研究の対象・方法

住宅の地域的特徴は、先述したように農家住宅、町家「民家」と称される伝統的な住宅、あるいは戦前住宅等のストックについてみれば、容易に確かめられる事実であり、これらに関する各分野での研究著績は多い。

これに対し、本研究では、従来ほとんど取り挙げられなかった地方（中核）都市における最近の新築持家に照準を合わせたいと思っている。

しかし、全国レベルでとり扱おうには、余りにも作業が膨大であり、実質的には不可能である。又、地域の典型プランを選択するとしても、対象とする住宅が量的に多く、かつ、均質化してきているだけに、選択基準と信頼性に問題が残る。

ところで近年、住宅の地域性・地方性に関する調査研究がにわかに活発化しているが、それらの研究方法は次の4つに区分できるであろう。

(1) 住宅統計調査、建築着工統計年報、国勢調査等の全国を網羅する統計資料を駆使し、都道府県、市町を単位とする住宅の地域間比較を行なう方法。

これは、計量可能な住宅規模、室数、持家率等の数値によって、地域差を解析するもので、いくつかの興味ある結果が既に示されている^(*)1)

(2) 全国から典型地域を選び出し、名地域の新築持家の平面採取と住み方の実態を調査する方法。

住宅のサンプリングでは建築工事届、確認申請（建築計画概要書）等から行なうのが最も偏よりの少ない方法であり、定性的な解析が主になる。但し、研究の組織化が不可欠の条件となる^(*)2)

(3) 個別地域の実態を多様な角度から詳細に調査し、住宅計画を規定していると考えられる地域的条件との関連性を把握する方法^(*)3)

地域間の比較は困難であるが、地域レベルでの住宅計画の在り方検討するためには欠かせない作業である。

(4) 全国的にほぼ均一の基準で供給される公的住宅を直接対象とし、これらが、各々の地域で実施される際の地域的配慮とか、基準の不適合性を明らかにする過程を通して、各地域の特性を浮び上らせる方法。

間接的で、地域の核心に触れるには難点があるが、地域比較の対象母集団がそろり、資料の精度が高い、資料入

(*)1) 福井大学玉置氏や室蘭工大真島氏等による「地方性」に関する一連の研究「地方都市における公団住宅需要の測定方法に関する研究」（1977.3）他

(*)2) ・「積雪寒冷地の住宅計画に関する研究」北大一足達、野口 1979 学会大学梗概
・「建築住宅平面にみる地域的特徴に関する研究」京大一 巽、坂田、浜川他など近年研究例は増加しているが、調査対象・方法は、一定していない。

(*)3) 農漁村住宅、町家、民家等を対象とする調査研究では一般的にみられる方法である。

手が容易である、研究結果は施策面に反映しやすい等、利点も多い。

本研究は、まず(4)の方法を採用し、調査対象として、都道府県住宅供給公社が作成している平面シリーズの1戸建分譲住宅(プラン選択方式)をとり上げることにする。

公社分譲住宅(木造・1戸建)の計画実態を全国レベルで把え、住宅計画にみる画一性と地域性又は個別性の分析に主眼をおいている。

次年度では、残された課題である各地域における平面計画の原則性=住宅規模とプランとの一定の地域的関連性を検討するとともに、一般的な持家を含めた住み方調査を併行させ、地域的条件=住宅計画の方法論=住み取の三者の関係を明らかにしたい。

とくに地域的条件として、①気候・風土的要素 ②「歴史的文化的要素 ③社会・経済的要素 ④都市的(化)要素が考えられ、これらとの関わり方を空間計画と物的計画に反映された事実と照合させ、その因果関係を整理する予定である。研究全体の枠組みは図-1のとおりである。

さて、本年度、研究対象とした都道府県住宅供給公社に対しては、次のような資料の依頼を行なった。収集状況及び、分析の基礎的資料は、表-1にあげている。

- (1) 供給実績(年度別、構造別、住宅型別)
- (2) 平面図集と購入希望者の多い平面型
- (3) 53年度募集パンフレット(立地・分譲価格が明示されたもの)
- (4) 住宅の内・外装仕上表
- (5) 住宅立面図(透視図)

表-1 資料の種類と収集状況

No.	都道府県名	供給実績	平面図	気候風土調査	住戸数	分譲価格	平面図の名称
01	北海道	○	○	○	○	○	分譲住宅図集
02	青森県	○	○	○	○	○	分譲住宅型式平面図集
03	岩手県	○	○	○	○	○	分譲住宅標準設計図集
04	宮城県	○	○	○	○	○	分譲住宅平面図集
05	秋田県	○	○	○	○	○	秋田の住い平面図集
06	山形県	○	○	○	○	○	分譲住宅平面図集
07	福島県	○	○	○	○	○	分譲住宅平面図集
08	茨城県	○	○	○	○	○	プラン図集(木造)
09	栃木県	○	○	○	○	○	あまの住いプラン図集
10	群馬県	○	○	○	○	○	分譲住宅(1階建て)平面図集
11	埼玉県	○	○	○	○	○	貸付型分譲住宅(1戸建)住宅、大宮新都心分譲住宅(タイプA)
12	千葉県	○	○	○	○	○	成田・マリンタウン(1戸建)住宅
13	東京都	○	○	○	○	○	
14	神奈川県	○	○	○	○	○	
15	新潟県	○	○	○	○	○	分譲住宅平面図集、新うね、大野住宅平面図集
16	富山県	○	○	○	○	○	平面図集
17	石川県	○	○	○	○	○	住宅平面図集
18	福井県	○	○	○	○	○	一般分譲住宅平面図集、清水プランニング、大野、新築地
19	山梨県	○	○	○	○	○	獨立分譲住宅(木造)集
20	長野県	○	○	○	○	○	平面図集
21	岐阜県	○	○	○	○	○	住宅タイプ集
22	静岡県	○	○	○	○	○	S53・110 プラン集(木造)住宅平面図
23	愛知県	○	○	○	○	○	
24	岐阜県	○	○	○	○	○	平面図集、設計図書
25	三重県	○	○	○	○	○	住宅プラン図集
26	京都府	○	○	○	○	○	
27	大阪府	○	○	○	○	○	大塚山-A型住宅住宅平面図
28	兵庫県	○	○	○	○	○	加西・イノ木住宅住宅平面図
29	奈良県	○	○	○	○	○	分譲住宅(木造)集、園部・ニュータウン分譲住宅(木造)集
30	和歌山県	○	○	○	○	○	分譲住宅(1階建て)住宅平面図、本町(木造)住宅平面図
31	鳥取県	○	○	○	○	○	分譲住宅(木造)集、木造住宅
32	島根県	○	○	○	○	○	獨立分譲住宅(木造)集、住宅図集住宅平面図
33	岡山県	○	○	○	○	○	分譲住宅(木造)集
34	広島県	○	○	○	○	○	S3・高層住宅設計図
35	山口県	○	○	○	○	○	住宅図集
36	徳島県	○	○	○	○	○	住宅平面図集
37	香川県	○	○	○	○	○	一般分譲住宅(木造)集(1階建て、2階建て)住宅型式
38	愛媛県	○	○	○	○	○	平面図集
39	高知県	○	○	○	○	○	一般分譲住宅(木造)住宅平面図、奈良分譲住宅(木造)住宅平面図
40	福岡県	○	○	○	○	○	花畑庄、中山分譲住宅(木造)住宅平面図
41	佐賀県	○	○	○	○	○	一般分譲住宅(木造)住宅型式図
42	熊本県	○	○	○	○	○	博多、竹原、花畑、西郷、▲分譲住宅(木造)住宅平面図
43	鹿児島県	○	○	○	○	○	博多、竹原、西郷、▲分譲住宅(木造)住宅平面図
44	大分県	○	○	○	○	○	博多、竹原、西郷、▲分譲住宅(木造)住宅平面図
45	宮崎県	○	○	○	○	○	住宅平面図集(木造)住宅型式
46	鹿児島県	○	○	○	○	○	博多、竹原、西郷、▲分譲住宅(木造)住宅平面図
47	沖縄県	○	○	○	○	○	平面図集

(注) 未回収は、神奈川、愛知、京都の三公社である。これらは戸建木造分譲住宅をほとんど供給していない為とみられる、又、東京都は回答を得たが、上記の理由で平面計画の分析からは除外している。

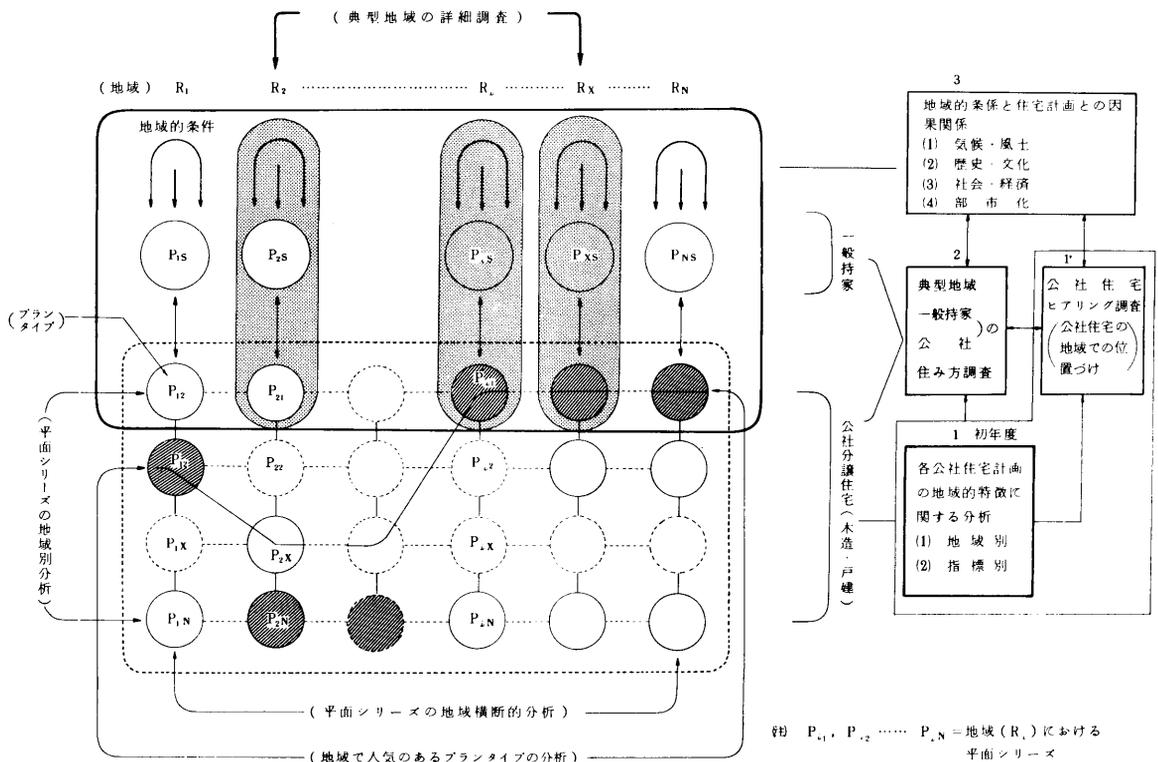


図-1 研究全体の枠組み

3 公社分譲住宅の特徴と地域でのシェア

研究の本来的な目的からいえば、公社分譲住宅は、調査対象として疑問がないわけではない。しかし、前述した方法論上の理由以外に、公社住宅をとりあげる意義は、(1) 計画主体は各地域自治体に属し、地域の住宅計画に関する情報を知りうる立場にある。平面シリーズは一般論としては、没个性的なものになり易いといえるが、詳細にみれば、地域の特徴が反映されているものである。(2) 供給の範囲は地方中核都市を中心にしており、民間建売分譲住宅と競合する部分が多く、地域全体の住宅計画に対しても一定の影響をもっている。(3) 近年、公社分譲住宅の人気の失速し、計画の見直しを迫られている地域が多くなっている。大半は供給する立地あるいは価格に帰因するとされるものの、需要の特徴を確認し、これを考慮した住宅計画が必要とされており、本研究の意図と一致する部分が少なくない。

即ち、公社分譲住宅の住宅計画は、公的住宅としての標準性、平等性に依拠し、地域の住宅の画一化に加担する一方、地域的な個別需要に地域レベルで対応せざるを得ぬ供給・計画上の制約条件を背負っている。

あるいは図-2に示すように、全国的性格-「もの」づくりとしての画一的条件と、需給の地域的性格-地域的条件によって空間計画は規定されているといえるわけであり、農家型の大規模住宅と大都市型のコンパクトな小住宅との中間領域に位置するものといえるだろう。

ところで、実体としての公社分譲住宅は、各地域において、どの程度のシェアをもっているであろうか。

各公社から回答のあった供給実績表と建築着工統計から、各々の地域での供給シェアを次にみておきたい。

図-3は53年までの公社分譲住宅の総供給戸数と、41~53年に着工した全分譲住宅に対する公社住宅の比率を都道府県別に示したものである。

東京、大阪等の大都市圏では、公社住宅は分譲マンションが大半を占め、全体に占めるシェアも1ヶ台と著しく少なくなっているが、地方県になると逆にほとんどが1戸建分譲住宅であり、民間の建売分譲住宅の供給が少ないこともあって、公社のウエートは全般的に高くなっている。

平均的には、各地域の分譲住宅の2割前後が公社分譲住宅によって占められているとみてよく、岩手、福島、島根、長崎の名地域では5割をこえている。圏域別には東北、北陸、山陰、四国、九州の地方圏域で目立っており、建売分譲住宅の主導的な役割りを果していることがわかる。

むろん、これらの地域では、全持家フローの8割~9割が注文住宅であって、県域全体に対する公社住宅のシェアはかなり低くなるのが推定される。

しかし、民間建売住宅や公社住宅が集中するのは、県庁所在都市を中心とする都市圏であって、そこでの影響は決して小さくはないだろう。

公社分譲住宅の地方圏域での役割りは、量的な面での評価もさることながら、住宅計画のもつ近代性、機能性、小規模性を特徴とする都市的性格の強い居住形態と供給方式の普及に大きく寄与していると推測される点である。

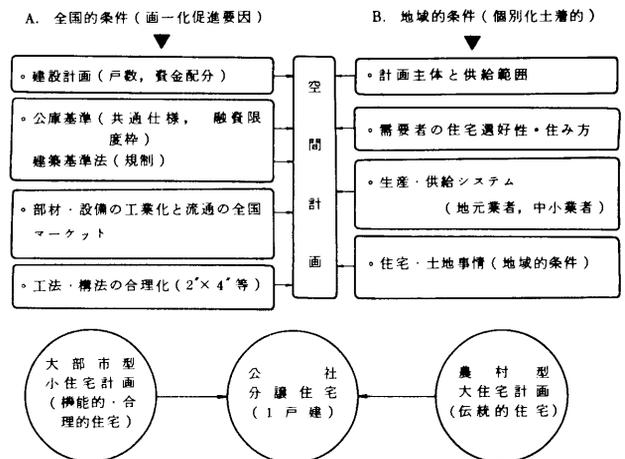


図-2 公社分譲住宅計画の規定要因

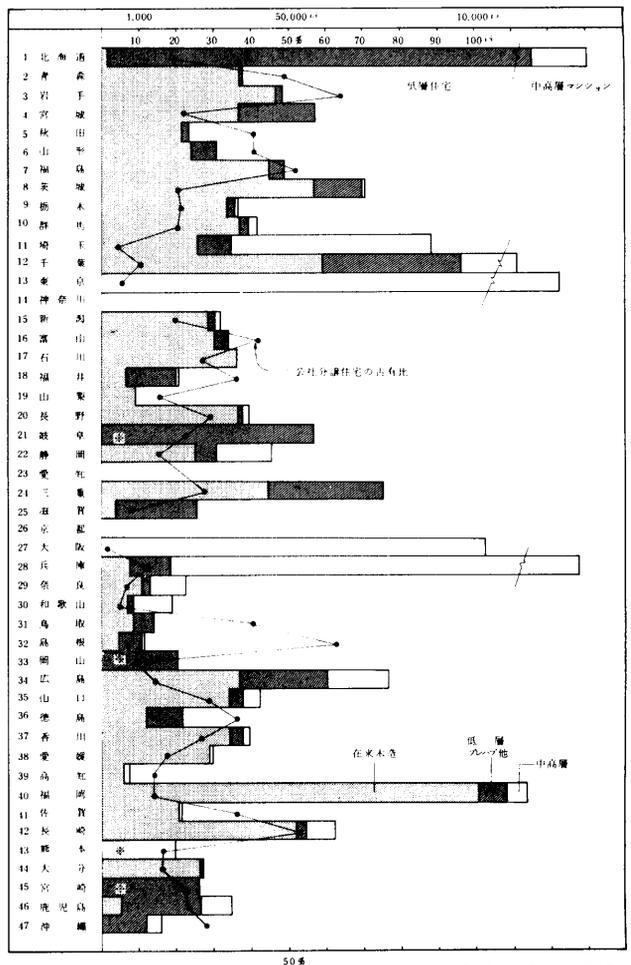


図-3 各地域の公社分譲住宅の供給量（ストック）とシェア（対全分譲住宅）

01 北海道

北海道は寒冷地という気候的条件と、明治以降、新しく開発された地域であるといった歴史的條件が住宅の平面計画を特徴あるものになっている。即ち、(i)その大半がブロック造である、(ii)開口部は二重窓である、(iii)すべてのプランがLDK型である、(iv)続き間及び床の間のあるプランはみあたらない、など、暖房効果を最も配慮した計画であると共に合理性、機能性に貫ぬかれており、後で述べる他地域との相違は顕著である。

但し、近年は、地域暖房方式による各室暖房や、新たに北海道へ進出した大手住宅企業のプランを採用するケースが増えた為か、DKとL(居間)の分離や、小さいながらも床の間があるなど、本土との距離は若干減少する傾向にある。

02 青森

全15タイプのうち、13タイプがDK型、2タイプがLDK型である。LDKは最も小さい住宅(61~62㎡)でとり入れられており、北海道に近似するが、この場合でも6帖+4.5帖の半続き間をもっている。DK型のうち2タイプのみが6帖+6帖の続き間である他は、すべて8帖+6帖の続き間であり、これらがDKと接している。

勝手口は、他の地域のようにDKの一部ではなく隔離されていること、DK以外はほとんど和室であること等が目立つ点である。

03 岩手

岩手県は23タイプのすべてが寄せ棟である。平面はDKが完全に孤立したものが若干みうけられるが、典型は、人気があるとされる、玄関オールから直接、広縁・続き間へと続く接客空間に重点のあるタイプで、地方色の強いプランである。

04 宮城

1戸建住宅のプランは、プレハブ住宅等の住宅企業のものを含めると93タイプと多く、分析が困難であるので在来木造住宅の27タイプを対象を限定している。平面計画は住宅規模によって次の2つに区分される。1つは66㎡以下の小住宅の場合である。これは4.5帖の台所と、6帖+6帖、又は6帖+8帖の続き間から構成されており、独立した部屋の少ないのが難点である。他は大半がLDK型であり、かつ続き間のあるのは21タイプ中、わずかに2例にすぎず、各々の個室が独立しているものが多くなっている。又、床の間のない数少ない地域の1つであり、人気のあるのはLDK型の都市性の高いタイプである。

05 秋田

宮城県と同様、小規模の平家住宅で続き間が多くみられ、大きな住宅になるほど、部屋の独立性が高くなっている。最も多いタイプはLDK型と公社が称しているものであるが、DKとL(洋室)は引違い戸で、明確に区

分されている。

LDKに接して続き間(8帖+6帖)のあるタイプはめずらしいが、岩手でも1例みられ、折衷的なものとして興味深い。又、3帖程度の納戸が設置されている。

06 山形

30タイプのうち、23が続き間タイプ、24がDK型であり、人気のあるのは、6+8畳の続き間のあるタイプである。なお、図に示すような老人室付住宅プランが用意されており、田の字形式の住宅に近似する伝統的な平面プランがみられる一方、大都市型のLDKタイプがみられ、落差の大きいシリーズとなっている。

07 福島

39タイプ中、DK型が16、LDK型-9、K型(台所=4.5帖弱)-9、DK+L型-5が示すように、相対的にK型の多いこと及び玄関は東入、又は西入が30と圧倒的に多いことが特徴である。DK型の場合は続き間、LDK型では各室を独立させるといった原則がみられ、DK型とLDK型の平面計画はかなり相異している。又、老人同居用の住宅として、流しを2カ所に設置している例は宮城、山形でもみられ、その平面構成は各地域ともほとんど同じであるが、福島は住宅の規模が小さくなっている。

08 茨城

プレハブ住宅は44タイプ、木造住宅は32タイプあるが、いずれもLDK型が主流である。木造住宅についてみると、%がLDK型(但し、DKとLの間は下り壁)である。人気のあるのは94~106㎡と、最も大きい住宅タイプに偏り、かつ、全体のプランの中では、数少ない8帖+6帖の続き間のあるタイプである。なお、全タイプにぬれ縁のついているのが当地域の特徴である。屋根型は7割が切妻、3割が寄せ棟であり、平家、2階建は半々である。

09 栃木

前記の茨城と傾向は似ている。24タイプのうち、15タイプがLDK型であり、人気のあるのは図に示すタイプである。このタイプは栃木に限らず、LDK型を主体とする大都市地域でも一般的に希望の多いタイプといえるだろう。なお、続き間型はわずかに3例にすぎない。

10 群馬

平面シリーズは木造-15、簡耐-4、枠組(工法)-2、プレハブ(工業化)住宅-53タイプと多様である。プレハブ以外のタイプについていえば、(i)屋根は寄せ棟が主体である(7割)、(ii)床の間のないものが多く、あってもせいぜい半間である(1間の床の間のあるのは3例)、(iii)LDK型が半数をしめる、(iv)完全な続き間は21例中、1例のみである、等からわかるように、全体的に都市性の高い合理的なタイプからなる。

11 埼玉

約がLDK型であり、他は大半がDK型である。住宅規模は60~75㎡が多く、小規模であるにもかかわらず、8割強が2階建である(延60㎡台から2階建)。土地事情の厳しさを反映して、プランは矩形に近いコンパクトなタイプとなっている。屋根型は木造では1例を除くと他は単純な切妻であるに対し、不燃軽量鉄骨造はすべて寄せ棟である。又、完全な続き間タイプは存在しない。典型は図(MIN)に示したプランになるのか。

12 千葉

木造住宅平面25タイプはすべて2階建であり、プランタイプは埼玉とほとんど変わらないが、切妻は6タイプと少なく、圧倒的に寄せ棟である。

特記すべき点は千葉では、LDK型、DK型以外に、台所が分離したK+D+L型の新しいタイプがみられること。この他、中2階の和室を設計、その下を車庫にするなど、全体的に没個性的なタイプを脱却しようとする意図がうかがわれる。住宅設計の技術水準の最も高い地域の1つといえるだろう。

15 新潟

25タイプのうち9タイプは70㎡未満であり、地域の事情とやや遊離したシリーズになっている。小タイプ(59㎡)から大タイプ(97㎡)までほとんどのものに続き間があり、玄関ホールは広い。プランはDK、6+6又は6+8の続き間、2階は2つの個室が典型であるが、バリエーションは多い。なお、図(*)に示したのは他に例をみないタイプである。廻り廊下になっており、接客重視の農家的、伝統的な間取り例である。

16 富山

平面シリーズは70㎡から119㎡まで51タイプとすこぶ多いが、53年度実施分は、このうち25タイプに絞っている。富山県の住宅の大規模性を反映してか、約半数が100㎡以上であり、他地域に比べると大きい住宅タイプが多くなっている。プランは70㎡台の小規模住宅で、LDK型が若干みられるが、他はすべてDK型である。又、平家は2割と少ない。富山の特徴は図(MAX)に代表されるであろう。接客室間がDK、茶の間と完全に切り離されている他、縁、廊下、玄関・ホール等の通路系面積の大きなプランである。又、規模は120㎡と、シリーズの中では最大であるが、それでも富山県の持家フローの平均値(約140㎡)には、はるかに及ばない。

17 石川

56タイプあるが、和洋の仕上げをかえただけのものが含まれており、実際のバリエーションはその半分程度である。石川の特徴は、出来るだけ室数を多くとり、続き間・縁側を設け、全体として開放的な間どりになっていることである。8帖間と縁側を洋室にかえるだけのタイプもみられるが、一般的には和室プランのものが多い

くなっている。図(MAX)は6DK(118㎡)タイプであるが、居室はすべて和室である。図のような和室相互間を通り縁で結ぶプランはめずらしい。なお、LDK型はシリーズの中に全く用意されていない。

18 福井

53年度一般分譲住宅平面図集は57例が挙げられており、そのほとんどが地元業者による木造住宅である。プラン数が多い為に、多種多様であるが、続き間、縁、仏間、床の間はほぼ共通する事項である。岩手で人気のあるプラン(図-03)が、福井でもみられること(但し、このタイプは新潟にもあるが、福井では2階に使所が設置されている点が異なる)、さらには洋室とか北側に縁が付設される例など、特徴のあるプランが含まれている。

縁は北陸一般にみられるが、これは通路機能以外にサニールームとしての役割りをもっている。

19 山梨

タイプ数は15と少ないが、LDK型-5、K+LD型-1が含まれ、プランは農村的なものから大都市的なものまで多彩である。但し、KとLDが分離する新しいタイプの場合でも、図(※)にみるように、2間の立派な床の間とか、地袋をとるなど、地方的な部分が随所にみられる。

20 長野

21タイプは、それぞれ「安価で合理的な小住宅」「広縁のある住宅」といったプランの特徴が記述されているので、プランの評価はしやすくなっている。このうち、人気のあるプランは「ゆとりのある玄関を持つ家」と、「調和のとれた大きな家」である。実際のプランよりも、むしろそうした評価に長野県の特徴がよく表現されているといえるが、前者ではDKが南面すること、後者は、2階南面に広い廊下をとっている点に注目したい。

21 岐阜

住宅タイプは63㎡(3DK)~100㎡(5DK)の31プランであり、4例を除くとすべて切妻である。

DK型-17、DK+L型-13、LDK型-1の配分からわかるように、DKとLがセットになっているタイプが、相対的に多くなっている。又、続き間をもつのは3割程度である。仏間、広縁等に、北陸に近似する和室の造りが感じられるが、全体の平面計画は合理的なものが多く、地方色は薄い。

22 静岡

木造住宅27タイプ、プレハブ住宅(不燃組立)81タイプと、後者のウェートが高くなっている。対象を木造住宅に絞ってみても、千葉、埼玉等の大都市圏で主流を占めるLDK型が典型タイプである。続き間は、52~63㎡の最も小さな住宅で4タイプ示されているが、都市的性格の強いプランが圧倒的に多くなっている。

24 三重

全体は80タイプであるが、左右反転タイプ、玄関戸の違いタイプが含まれ、実タイプはその半数である。うち50タイプ(実タイプ25)は平家造であり、人気のあるのも、平家造の方が多くなっている。住宅の規模は平家が70～94㎡、2階建が90～113㎡と、90㎡前後を境いに区分されている。

人気のあるタイプは6帖+8帖の和室続き間、又は6帖+8帖(洋間)の2部屋がDKに接続し、DK+和室(茶の間)型になっているものであり、広縁のないタイプである。全タイプに床の間のついているのが特徴的な事項といえようか。

25 滋賀

木造、プレハブを含め21タイプあり、いずれも2階建である。建築面積は43～65㎡、延面積は65～95㎡(3DK～4LDK)であり、埼玉、千葉と同じく土地事情が住宅の形態をきめているといえる。

プランはいわゆる合理的な間取りであって、大都市圏型であるが、LDK型は少なく、DK型が中心である。

なお、当会社では関東間、関西間、メーター間の異なるモジュールの住宅をそろえている点が特徴である。

30 和歌山

プランシリーズは平家造のみ12タイプであるが、特定団地の平面図集ではすべて2階建(木造7タイプ、枠組3タイプ)となっている。平家造は6帖+4.5帖、6帖+6帖の続き間が多く、かつ人気のあるのもこのタイプであるが、2階建では続き間は全くみられず、都市的なプランとなっている。近年は平家から2階建住宅へと供給方針が変化してきているようである。

31 鳥取

29のプランの内訳は木造5、プレハブ24であるが、人気のあるのは木造住宅の2タイプである。その1つは図に示すとおり、半続き間(他の木造は個室分散型)、中廊下型のタイプである。他方プレハブ住宅は大手住宅企業のものであるが、4割近くが半続き間をもち、大都市圏のプレハブ住宅に比べると、開放的なものが多くなっている。又、LDK型は4例みられるが、DK部分を主体とするやや中途半ばなものとなっている(木造)。

32 島根

プランは在来木造9、プレハブ4、枠組5、耐火2の計20タイプである。又、LDK型は4、DK+L型が5、DK型が11の構成である。在来木造は大半が切妻であるが、プラン(LDK型)と外観(入母屋)が不齋合な感じのものも散見する。人気のあるタイプは他地域と同様、平凡な住宅になるようである。

33 岡山

岡山は、LDK型がみられない、(但し木造30タイプについて)反面、続き間タイプは2割にすぎず、全体的

には、個室重視のコンパクトで合理的なプランが多くなっている。図(*)に示すプランは、DK、Lともに7.5帖大である、階段をはさんで和室、洋室に明確に区分されている等、平面構成は個性的である。

35 山口

会社の独自設計分(木造)についてみてみよう。タイプは18である。平家、2階建は半々である。山口の特徴は、DK以外に洋間を1室確保し、完全な続き間タイプはみられないことであろう。図の右2つがその例である。又、2階建は総2階に下屋のつく形が一般的な手法のようであり、屋根型はすべて切妻である。全般的に農村的なタイプではないが、大都市的な精錬された感じはなく、1種独得である。

36 徳島

プランシリーズはDK型-20、LDK型-10、DK+L型-5の各タイプからなる。人気のあるのはDK型-2、LDK型-2、DK+L型-1の5タイプであり、LDK志向が強くあらわれている。典型は図(POP)に示すものである。一見、大都市型のプランに似ているようであるが、中央に南入の広い玄関・ホールがある点が異なっている。なお、このタイプは74㎡と小住宅であるが、120㎡(MAX)のプランと比較してみると、基本的な構成は変わらず、部屋の規模がそれぞれ大きくなっているにすぎないことがわかる。

37 香川

53年度実施のプランについてみると、木造は6タイプ、プレハブ12、耐火16タイプである。プレハブ、及び耐火造(RC)は、総2階建に近いコンパクト型であり、大都市圏のタイプと差はない。公私室が立体的に区分された、極めて合理的・機能的なタイプである。

しかし、人気のあるのは、やはり木造住宅のようである。6つのタイプは、いずれも66～69㎡と小さく、平家造である。平面構成はLDK型、DK+L、DK+和室(茶の間)と異なっているが、希望の多いタイプに共通するのは、玄関ホール近くに洋間をとったタイプである。

38 愛媛

平家造12タイプ、2階建6タイプが用意されている。住宅規模は、平家が55㎡(3DK)～76㎡(4DK)、2階建が78㎡(4DK)～86㎡(4DK)である。特徴は、平家の場合、6帖と4.5帖、又は6帖の半続き間、続き間をもつこと、2階建は8帖の洋室を必ず付け、LDK型がみられないこと、及び各タイプともヌレ縁とテラスに洗場があること。なお、人気のあるのは続き間と洋室のある標準的なタイプであり、南入が多くみられる。

39 高知

高知はすべて平家であり、住宅規模も60～64㎡(3K～3LDK)と小さい。プランは8タイプ(53年度実施)である。そのうち半数がLDK型、残りはDK型と

K型に二分され、LDK型が主であるが、人気のあるのはK型である。

高知では6帖よりも4.5帖の和室が多く、人気のある続き間も4.5帖+4.5帖である点が特異である。

40 福岡

プランは平家造-6タイプ、2階建-3タイプである(53年実施)。平家はLDK型(1例)を除くDK型についてみると、6帖+6帖(又は8帖)の続き間と洋室、DKが基本型である。規模が大きくなると、これに4.5帖の洋室、次に6帖の和室が追加される。2階建の場合は、続き間がなくなるが、洋室(応接間としての位置)は必ず設けられるようであり、隣県の山口県、愛媛県と傾向は近似する。

41 佐賀

左右反転タイプがあるので実タイプは8である(平家5、2階建3)。しかし、LDK型(最も小タイプ)、DK+L型、DK型(平家造は6帖+6帖の続き間、2階建は各室分離)と性格の異なるタイプがそろっている。逆にいえば、特徴はないということになるが、LDK型住宅でLDKに接続する和室3つのうち、2つまでが4.5帖と小さいのが目立つ。小住宅のプランとしてLDKタイプが利用されている例である。但し、人気のあるのは最も大きな続き間のある住宅タイプ(寄棟、平家造)である。

42 長崎

木造住宅4、プレハブ16、枠組2、耐火4の各タイプが示すように、構造、プランは多様である。このうち木造のみについてみても、他地域でみられるものがほとんどを占め、特徴はない。但し、九州は全般的に平家が多いのに対し、長崎では大半が2階建であり、続き間タイプの少ない都市的な性格のものに偏る点が特記されよう。

43 熊本

タイプ数が少なく(5タイプ)、かつ平家、2階建ともに4DKであって、特徴はほとんどみられない。ただし、佐賀、福岡に比べるとやや和室が多く、仏間があったりするが、LDK型はむろん、完全な続き間タイプもなく、合理的なDK型が中心である。

44 大分

プランシリーズは平家-7、2階建-6の13タイプである。1タイプを除く12タイプは、いずれも続き間のあるタイプである。特に平家で人気のあるのは、南面して6帖+6帖+6帖の通し間のみられるプランである。この他は2階建、100㎡以上の大規模住宅の希望が多くなっている。なおすべてがDK型であり、LDK型は用意されていない。

45 宮崎

平家建23、2階建9と圧倒的に平家が多い他、次のよ

うな特徴点を指摘しうる。まず、南面全体に縁、又は広縁のあるプランが多いこと、第2にLDK型+個室分散、DK型+続き間の2系列に明白に区分される。第3は、北九州に多くみられる、玄関ホールの最短位置に洋間を設けるという原則性等である。

とくに図の平家(MAX)のプランは過去のプラン集から引きつがれたタイプであり、続き間・広縁の構成は特異である。

46 鹿児島

14タイプのうち、平家は9、2階建は5タイプであり、人気のあるのはいずれも平家建である。

1つは最も小さいDK型(78㎡)、1つは最も大きいDK型(92㎡)であって、前者は6帖+6帖、後者は8帖+6帖の続き間と縁側をもつタイプである。もう1つ人気のあるのはLDK型であるが、これは図5-46に示したように、縁側、6帖の和室続き間のある開放的な間どりになっているのが特徴である。

47 沖縄

すべて鉄筋コンクリート造、又はコンクリートブロック造である。プランは9タイプあり、住宅規模は56㎡(2LDK)~81㎡(4DK)である。過半数がLDK型であり、典型は図(MIN)のタイプである。玄関ホールは小さく、床の間、続き間はみられない。但し、人気があるとされているタイプは平家の中では、唯一つのDK型であり、床の間がつくなど、本土の一般的なタイプに近くなっているが、このタイプとしては洋間の多い点が異なるようである。

図-5 地域別・プランシリーズの実例

注1. 人気のあるプランが複数の場合、大きなプランを選んで示している。
 2. *印は人気のあるプランが不明であり、シリーズの全ての特異なプランを選んで示している。
 3. (1F)以外はすべて2階建。

地域	最小プラン (MIN)	人気のあるプラン(POP) (但し*印のものは除く)	最大プラン (MAX)	地域	最小プラン (MIN)	人気のあるプラン(POP)	最大プラン (MAX)
01 北海道	55.9㎡ (1F) (設備)	89.2㎡ (1F) 	 109.2㎡	02 青森	60.8㎡ (1F) 	91.5㎡ 	 105.3㎡
03 岩手	63.8㎡ (1F) 	111.6㎡ 	 (洋室) 115.0㎡	04 宮城	59.7㎡ (1F) 	94.4㎡ (1F) 	 116.8㎡
05 秋田	63.8㎡ (1F) 	92.7㎡ (* (階段) (床の間)	 119.2㎡	06 山形	55.0㎡ (1F) 	109.3㎡ 	 119.4㎡
07 福島	59.6㎡ (1F) 	同右	 103.1㎡	08 茨城	58.8㎡ (1F) 	同右	 106.8㎡
09 栃木	58.8㎡ (1F) 	84.5㎡ 	 101.0㎡	10 群馬	69.6㎡ 	85.7㎡ (1F) 	 103.3㎡
11 埼玉	52.2㎡ (1F) 	63.8㎡ (* 	 78.7㎡	12 千葉	65.4㎡ 	89.0㎡ 	 89.0㎡
15 新潟	60.5㎡ (1F) 	95.7㎡ (* 	 97.7㎡	16 富山	72.8㎡ (1F) 	同右	 143.0㎡
17 石川	61.3㎡ (1F) 	95.7㎡ 	 117.9㎡	19 山梨	62.0㎡ (1F) 		 87.9㎡

地域	(MIN)	(POP)	(MAX)	地域	(MIN)	(POP)	(MAX)
20 長野	60.9㎡ (1F) 	84.5㎡ 	109.3㎡ (POP) 	21 岐阜	70.1㎡ (1F) 	86.9㎡ 	100.6㎡
22 静岡	52.2㎡ (1F) 	89.0㎡ (※) 	113.9㎡ 	24 三重	75.9㎡ (1F) 	84.5㎡ (1F) 	99.0㎡
25 滋賀	 64.6㎡	64.6㎡ 	 87.8㎡	28 兵庫	 69.2㎡		 108.1㎡
29 奈良	68.7㎡ (1F) 		72.9㎡ (1F) 	30 和歌山	60.5㎡ (1F) 	同右	 87.4㎡
31 鳥取	58.8㎡ (1F) 	58.8㎡ (1F) 	81.1㎡ 	32 島根	76.7㎡ (1F) 	99.8㎡ 	同左
33 岡山	71.8㎡ (1F) 	93.0㎡ (1F) 	104.7㎡ 	35 山口	69.9㎡ (1F) 	78.5㎡ (1F) 	87.5㎡
36 徳島	59.6㎡ (1F) 	79.9㎡ 	 120.0㎡	37 香川	同右	65.5㎡ 	
38 愛媛	56.3㎡ (1F) 	70.2㎡ (1F) 	86.1㎡ 	39 高知	同右	60.8㎡ (1F) 	64.1㎡ (1F)

地域	(MIN)	(POP)	(MAX)	地域	(MIN)	(POP)	(MAX)	
40 福岡	68.6㎡ (1F) 	83.0㎡ (1F) 	92.9㎡ 	41 佐賀	71.3㎡ (1F) 	83.9㎡ (1F) 	86.7㎡ 	
	64.7㎡ (1F) 	72.2㎡ (1F) 	85.1㎡ 		43 熊本	73.5㎡ (1F) 	78.4㎡ (1F) 	101.4㎡
	76.7㎡ (1F) 	79.4㎡ (1F) 	110.1㎡ 			45 宮崎	67.3㎡ (1F) 	74.5㎡ (1F)
62.5㎡ (1F) 	91.6㎡ (1F) 	90.8㎡ 	47 沖縄	61.8㎡ (1F) 			76.7㎡ (1F) 	81.0㎡

6 住宅計画のバリエーションと地域性

次に、住宅計画を解析する基本指標、及びオプション（補助的）指標の中からいくつかの項目を選定し、これについて地域横断的に考察しておく。

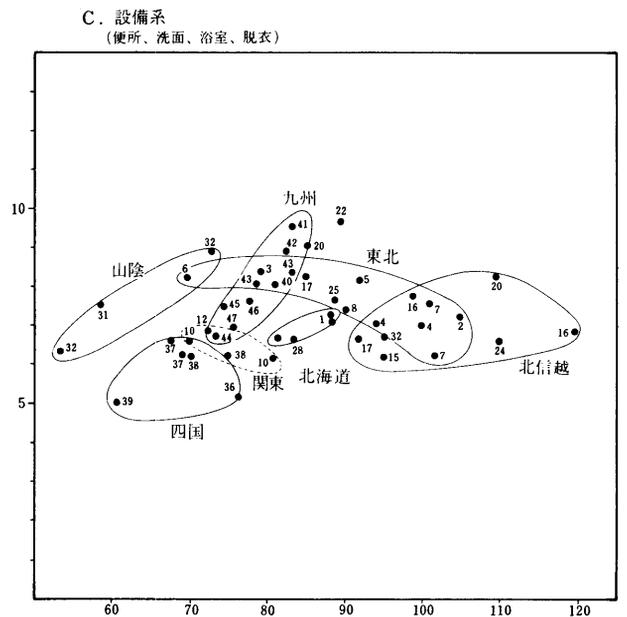
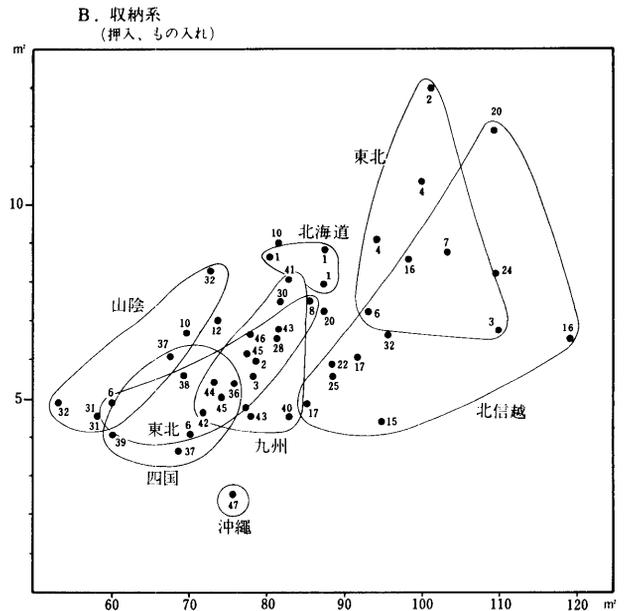
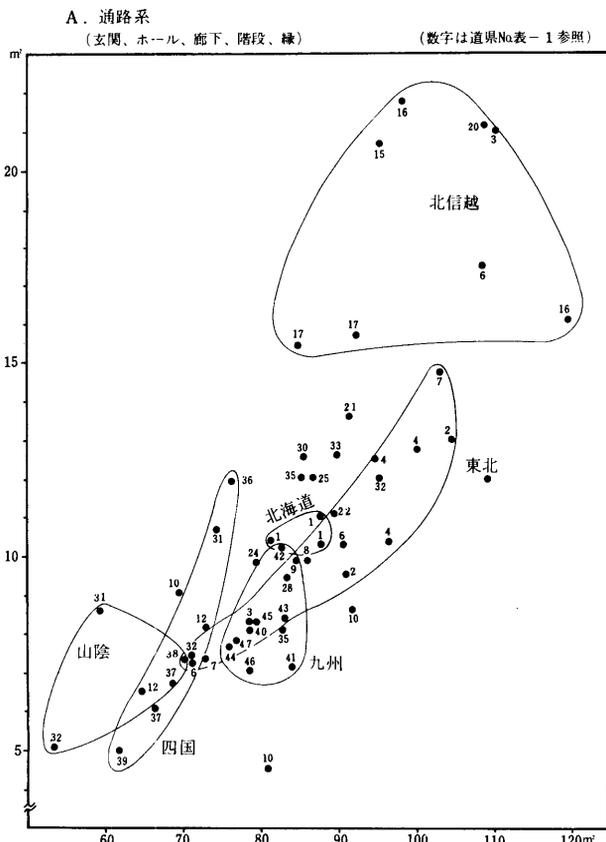
(1) 住宅規模と所要空間との関係

プランシリーズにある住宅の平均規模は地域全体の持家ストック、持家フローの各々の平均値と相関していない。北陸での公社住宅プランは、他地域よりも全般的に大きく、大都市圏、四国は逆に小さいプランに偏る等の特徴は認められるが、大半は70~90㎡の間であり、規模面での地域差は少ない。したがって、住宅規模に関するプランシリーズ全体の定量的解析の意味は薄く、むしろ住宅規模と各々の所要空間とのバランス、構成方法に地域的な特徴があるのではないかと考えられる。

プランシリーズの平均値よりも地域全体の一般的な持家規模との相関性がみられる「人気のあるプラン」について、住宅規模と各所要空間との関係を検討しておきたい。

図-6(A)(B)(C)は、縦軸に通路系（玄関、ホール、廊下、階段、縁）、収納系（押入、物入れ）、設備系（浴室、洗面、便所）の各々の面積を、横軸には住宅の全延床面積をとり、各公社のプランをプロットしている。（但し、人気のあるプランが複数の場合、マクロな圏域区分—東

図-6 所要空間の大きさ（人気のあるプラン例）



北圏、北信越圏等—で囲まれるタイプを図示している。）

<通路系>

通路面積は、全般的に住宅規模が上昇するに伴ない、加速度的に大きくなることわかる。しかし、その増加傾向なり、一定規模の場合の通路面積の構成比は県レベルより広域の圏域によって異なるようである。例えば、北信越、東北圏の人気のあるプランはいずれも90㎡以上の比較的大きな住宅が選ばれており、両者は近似するが、通路系面積は北信越の方がはるかに大きい。北信越は玄関、ホール、廊下、縁等の居住以外の空間比が高いことを意味している。

<収納系>

押入れ、物入れの収納面積と住宅規模との関係は通路系ほど明確な差はみられない。80㎡前後の住宅で、5~8㎡（3畳~5畳分）が一般的であるが、規模が近似す

る北海道では収納空間は広く、沖縄では目立って小さい点が特異である。又、90㎡以上の地域でみると、前項の通路系とは逆に東北圏の方が北信越よりも全般的に大きく、両圏域に平面構成上の差異のあることがわかる。

<設備系>

ある公社のプランシリーズについてみると、設備系面積と住宅規模の関係は若干認められるが、設備系面積は大半が6～8㎡(4～5畳分)程度であり、地域のゾーニングは難かしい。但し、九州北部～山陰は他地域に比べると、やや設備系面積は広く、四国、関東では逆に狭くなっている。

(2) LDK型からみたプランのバリエーション

大半の地域がLDK型のプランを揃えており、公社住宅平面の主要タイプになっている地域も少なくはない。

まず、住宅平面構成に占めるLDKの位置関係からは

(i) LDK中央型 (ii) LDK片側型 (iii) LDK占有型に大別される。(i)は北海道を中心とする各地方圏、(ii)は埼玉、大阪等の大都市圏、(iii)は千葉、静岡、和歌山等の特定地域でみられる型といえるであろう。さらに、これをLDKと他の居室とのつながり方についてみると、図-7に示す、著しく多様なバリエーションがあり、地域的な特徴がうかがわれる。

同図は、LDKと和室の接続有無、続き間の有無によって、上記の型を細分類したものである。むろん、北海道、宮城、栃木、千葉、静岡、沖縄等のLDK型タイプの多い地域では数通りのタイプがある。同図では他地域に比べ、特徴のあるタイプを挙げているが、多くは各公社によってプランニング上の一定の傾向があると考えて支障はない。

即ち、一般的には①気候的条件 ②伝統的(地方的)条件 ③都市的条件によって、これらのバリエーションが生じていると推定される。

例えば、北海道から沖縄まで非常に近似したLDK型が存在する(図-7、A-1タイプ～A-4タイプ)。いずれも個室が分離したタイプであるが、北海道(A-1)は暖房効率を中心、沖縄(A-2')はプラン縦方向の通風を配慮するなど、気候的条件の影響がみられる。

又、青森、福島、富山、福井、長野等の東北、北信越(B-1、B-2)では、LDKに並行して続き間(縦型)があり、開放的な間どりになっている。これらは一般的にも続き間の多い地域であり、農村的、伝統的なLDKタイプといえよう。

鹿児島(B-2)では同じく続き間(室規模は小さい)と縁がセットになっており、他地域と区分される。

秋田、岩手(C-1)はLDKにごく普通の続き間(模型)がつくタイプであるが、茨城・岐阜等(C-2)では続き間とLDKが分離されている。なお、(D-1)(D-2)は続き間がなくなったタイプである。

大都市圏では、(E-1)にみるように、LDKに1室居室が接続するタイプになる。敷地条件の厳しさを反映し、総2階に近いコンパクトなプラン例である。

さらに、建築面積に余裕があると、兵庫(F)、宮城(G)のようなタイプになるが、他方、LDKはDL+K、あるいはL+D+Kに分離したタイプが北海道、埼玉、千葉、静岡等で散見する(H(1))。LDKの発展段階からいえば、非常に先進的な住宅タイプといえる。(J-1)(J-2)では1階が完全に公室化(洋式化)し、公私室が立体分離したタイプである。

(3) 続き間のバリエーション

北海道、埼玉、千葉等の数地域を例外とし、他はいずれの地域とも続き間をもっている。そのバリエーションは図-8に示すとおりである。

最も一般的なものは図で<一般型>と称しているものであり、住宅規模の大きい東北、北信越では8帖+6帖九州では6帖+6帖が普通である。

逆に、住宅規模の小さい四国、山陰では6帖+4.5帖が多くみられるが、縁側がついており、実質的には6帖+6帖、8帖+6帖の大きさに相当する。<縁型>と称している最小のタイプは4.5帖+4.5帖に縁側のついた高知であり、最大のもは、山形、長野、富山、石川のタイプである。

又、南入り玄関から直接、広縁-続き間のあるタイプは岩手、宮城、福井、新潟等でみられ、農家住宅の影響が強く感じられる。

この他、<タテ型><三室型><田の字型>に区分できる多様なバリエーションがあり、LDK型住宅の少ない地域に特徴的なタイプがそろっている。中でも<三室型>の愛媛、大分、宮崎、石川の各タイプは他ではみられないプランである。

(4) オプション(補助的な指標)にみる地域の特徴

① 床の間

北海道、宮城を除く全地域(公社)で床の間はみられる。しかも、「一間」の床の間が普通であり、新潟、富山、山梨、長野、岐阜、愛媛では「1間半」と立派なものが散見される。

逆に「半間」の形だけの床の間の多いのは四国であり、北海道に近接する青森及び埼玉、静岡、奈良の都市的地域では相対的に床の間のあるプランは少ない。

② 縁・広縁・ぬれ縁

縁・広縁のあるプランは住宅規模の大きい北信越が中心である。又、東北、山陽、南九州でもかなりみられるが、LDK型の多い北海道、青森、秋田、関東(茨城を除く)、静岡、滋賀、沖縄の各地域及び北九州では全くみられない。

ぬれ縁は愛媛、香川、徳島の四国圏と茨城の4県のみであって、このうち、愛媛、茨城は全タイプに付記

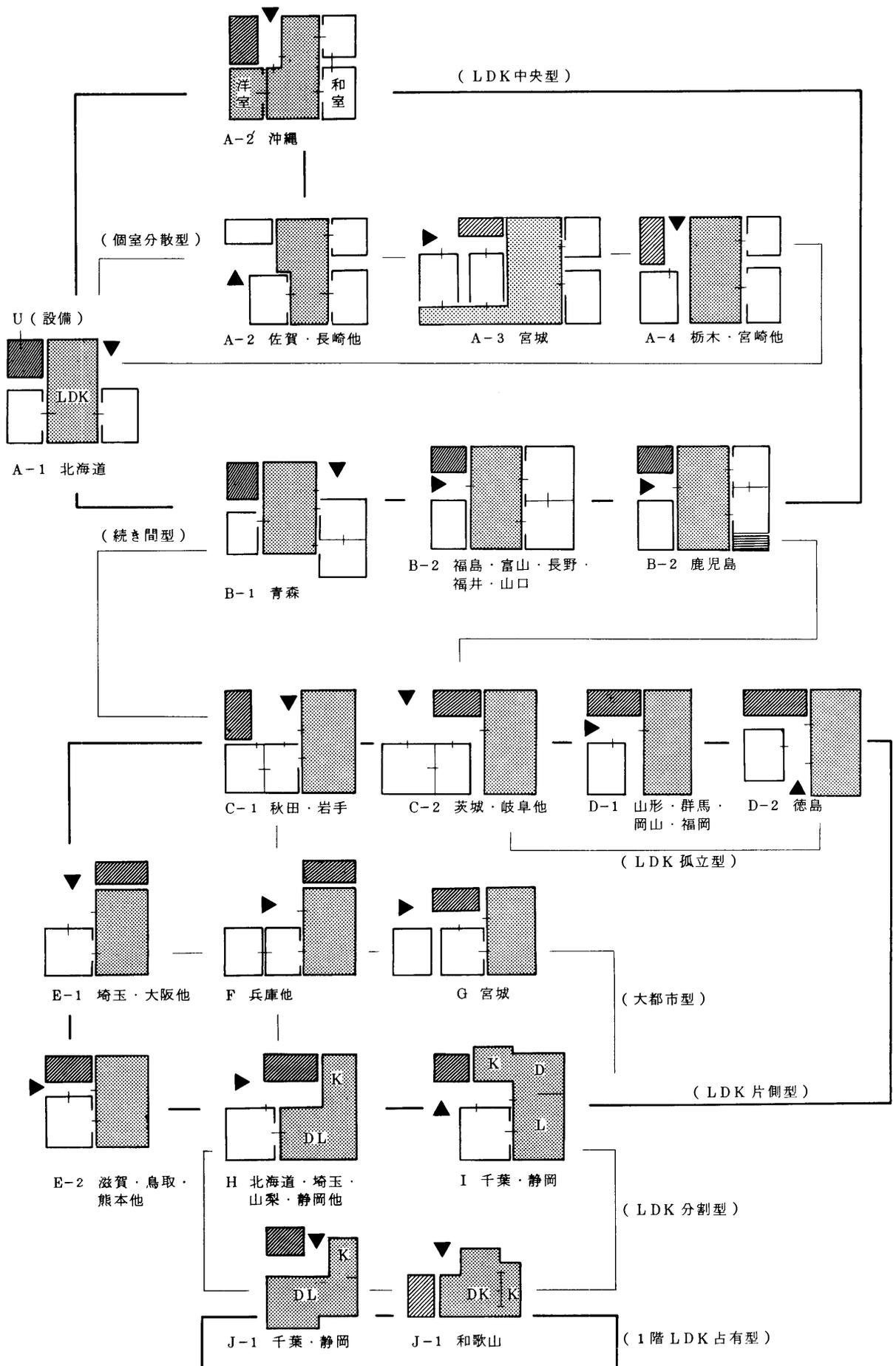


図-7 LDKからみたプランのバリエーション(木造)

されている。

③ その他

以上の他、住宅を構成する各種の部分について検討する必要があるが、収録した平面の表現精度に問題があるので、一般的な項目に限り、みておく。

タンス置場は約6割の地域で見られ、とくに、岩手、山形、茨城、新潟、長野、香川の各県では一般的である。が、一部を除き、人気の有無とはそれ程関係していない。

仏間(仏壇置場)のある地域は、新潟、富山、石川、福井の北陸と、岐阜、愛媛、長崎、熊本の各県に限られている。北陸では一般持家においても、仏間の保存率が高いとされているから、地域的な特徴をよく示しているといえるだろう。

納戸は北海道、東北、北信越を除くとほとんどが設

置されていない。

(5) 屋根形状

住宅の外観デザインが判明したのは約4%の地域である。屋根形状は、最も地域的な特徴を示すものであるが、公社分譲住宅では、切妻と寄棟が大半をしめ、極めてシンプルである。そのことが公社住宅の画一性を一層強調することになっているのではないと思われる。あえていえば、東日本では、切妻、寄棟が半々であるに対し、北陸、西日本では切妻が多くみられるようである。但し、ここでは外観を示す余裕がないが、同じ寄棟でも、東北と九州の各地域では屋根勾配等に差異があり、そのデザインセンスは微妙に異なっている。

[注] 同系列の場合、大きい室タイプのもを整理している(EX 6+6と6+8併用の場合6+8)

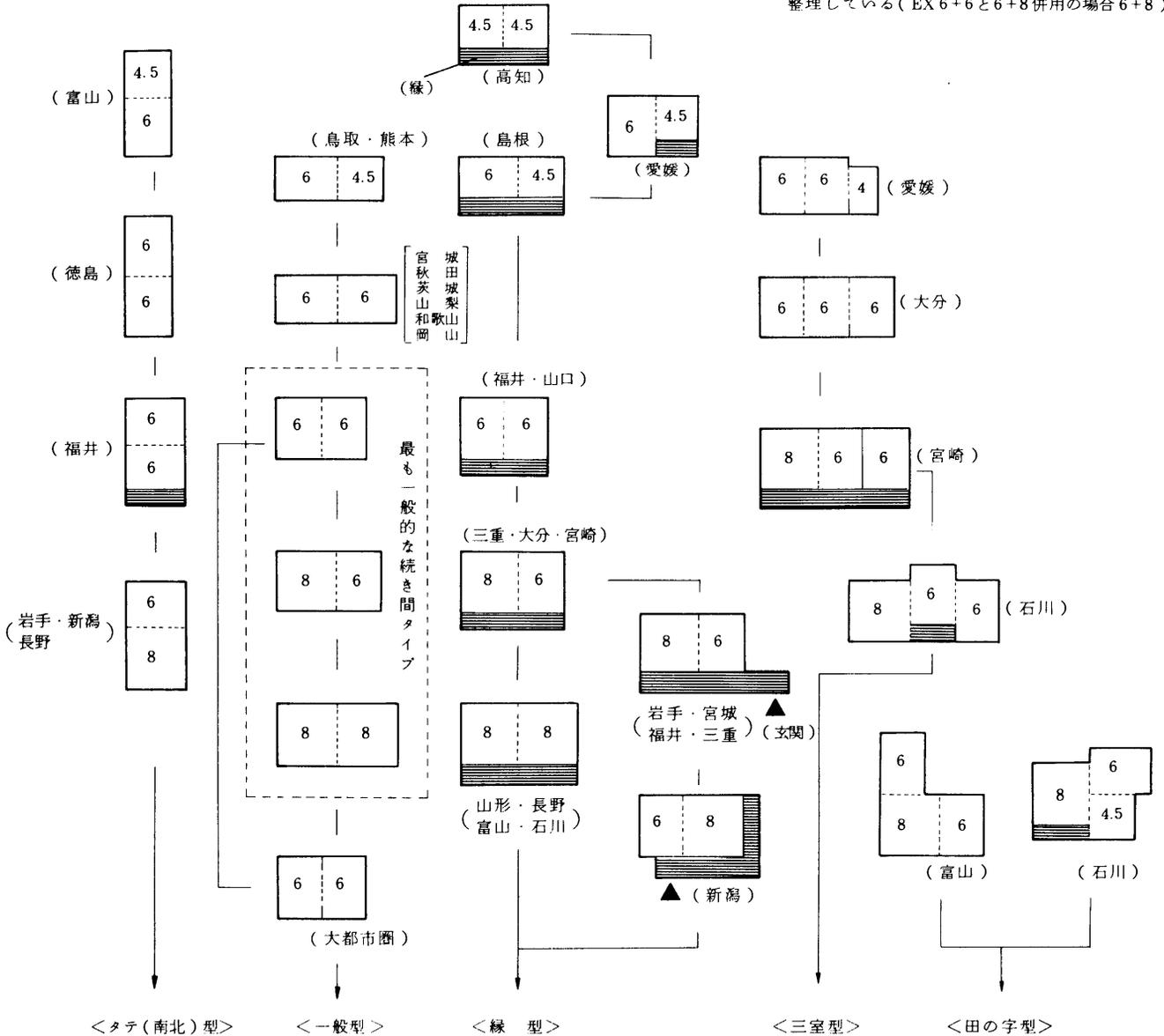


図-8 続き間のタイプ

7 まとめと今後の課題

以上を住宅計画の画一性と地域性（個別性）の視点から要約すると次のようになる。

＜画一性＞

- ① 平面シリーズは、北海道がLDK型のみ、石川、三重、大分はLDK型がなく、すべてDK型のプランであるが、他はいずれもLDK型、DK型の2系列のプランタイプが用意されている。
- ② 完全な続き間は、北海道、沖縄と埼玉、千葉、滋賀、奈良の大都市圏及び静岡を除く各地域で一般的にみられる。地方圏で人気のあるプランも、続き間タイプが多い。
- ③ 70～90㎡の住宅規模のものが各地域とも最も多く、地域の一般持家住宅の規模との相関はほとんどない。
- ④ 平面シリーズの中で最小プランは55～70㎡であり、その平面計画はいずれも酷似している。但し、最小プランがLDK型である地域とDK型（続き間）の地域に2分される。
- ⑤ 2階は、2つの独立した居室からなるものが圧倒的に多く、画一的である。
- ⑥ 屋根形態、外観デザインはシンプルであり、地域的に特徴のある地域は少ない。

＜地域性（個別性）＞

- ① 平面計画のバリエーションは多様であり、そのことが全体として地域差とか、地域特性を薄めているのであるが、平面シリーズの中には他地域でほとんどみかけないという意味で特徴のあるプランが含まれている場合が多い。
- ② 大半がメニュー方式であり、そのメニューに規定されているものの、地域で人気のあるタイプは、北海道・東北・北信越・大都市圏・四国・九州・沖縄のより広い圏域レベルで考察すると各々の差異がわかり易い。

それは、所要空間（居室系、通路系、収納系）の広さと平面パターンに端的に示されている。

- ③ 各公社の平面構成は、DK系列とLDK系列に続き間型（続き間なしを含め）をクロスさせることによって地域的な特徴をみることができる。マクロにみれば、次のようである。

	続き間なし	続き間あり
LDK系	北海道、関東、東海 近畿、四国、沖縄	東北、山陰、南九州
DK系	中国、北九州	北信越、四国、 南九州、東北

- ④ 平面構成は、地域の土地事情、イス座生活の一般化、個室重視といった都市化要因と、需要者の接客室間、和

室志向等の伝統的及地方的要因によって基本的に決定されていると考えられる。又、ディテールについてみると、気候風土的条件による地域差があらわれている。

最後に、本年度研究で残された問題と次年度の継続課題を検討し、締めくくりをしたい。

本年度、取り挙げた公社分譲住宅（木造1戸建）の計画は、平面シリーズ全体の定量的な解析と、その中の一部の定性的解析によって県レベルよりもさらに広域レベルでの圏域差が確かめられた。しかし、各公社についてみると、著しく個別的であり、住宅計画技術のレベル差が目立ち、それがそのまま地域差として露呈している点は拒めない。

さらに、当報告では住宅規模と平面構成パターンとの関係についてはほとんど触れられなかった。

例えば、住宅の規模が増加するに伴ない、平面構成は変化するが、それは次のような型に区分できるであろう。

- ① 室数増加型 / 3DK → 4DK → 5DK → 6DK
- ② 室規模拡大型 / DK, 個室 - 4.5帖 → 6帖 → 8帖
LDK - 12帖 → 14帖 → 16帖
- ③ 設備系拡大型 / 洗面・浴室・便所が広がる
- ④ 通路系拡大型 / 玄関・ホール・廊下・等が広がる。
- ⑤ 接客系 " / 応接間・座敷・続き間等
- ⑥ オプション追加型 / 床の間・縁・タンス置場・収納・家事室等
- ⑦ 住宅タイプ変更型 / DK型 → LDK型,
LDK型 → DK+続き間型等

⑧ 以上の複合型

以上の変化のしかた（バリエーション）に各々の地域の特徴が認められるのではないかという仮説の検証が、今後の1つの課題でもあり、より精度の高い研究に着手したいと考えている。

＜研究担当者＞

主査 石原 清行（金沢工業大学）
委員 川上 光彦（金沢大学）
" 金木 健（石川高専）

協力 金沢工業大学石原研究室
石田 茂
小口 喜弘